みんぱくリポジトリ
国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnolo

マヤ興亡：文明の盛衰は何を語るか?

メタデータ	言語: ja 出版者: 公開日: 2015-03-23 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 八杉, 佳穂 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10502/5663

第九章　神々の世界と儀式

マヤにはたくさん神様がいたことは確かであるが、どのような体系であったのかは、実はよくわかっていない。たくさんの手掛かりがあるにもかかわらず、はっきりしないのである。

マヤの神を知る手掛かりはいくつかある。もっとも大切な資料は、マヤ人自身が残した資料である。古典期では、碑文と土器が代表的な資料となる。骨や貴石などに彫り刻まれた資料も役に立つ。後古典期では、絵文書がもっとも重要な資料である。スペイン人の征服以後では、マヤ人の残した文書、たとえば、キチェ族の『ポポル・ウフ』やユカテク・マヤ族の『チラム・バラムの書』や『バカブの儀式』などに加え、スペイン人が残した資料がある。ランダやコゴリュード、ビリャグティエレ・ソト・マヨール、フエンテス・イ・グスマンなど、資料を残した人の名はたくさん挙げることができる。そうした歴史的な資料に加え、現代マヤ人が伝えている神々や儀礼がある。それらは民族誌のなかに探すことができる。現代マヤ人の伝える民話や神話も役立つ。

こうした資料が一致しておれば、何ら困ることはないのであるが、時に一致することがあっても、たいていは、どのように結びつけてよいのかわからない資料の間で、困っているのである。

GI

GII

GIII

図18　パレンケの三神「葉の十字の神殿」より

古典期に、マヤ人の残した碑文や土器などの直接関係する資料の分析は、最近急速に進んできた。中でももっとも有名なものは、GI、GII、GIIIと名づけられている神々である。これは、パレンケの碑文の研究から同定されたが、ティカルやカラコルなどの石碑や土器などにも登場するので、古典期前期から、相当重要な神であったことは確かである。三神はマヤ紀元前後に生まれた神々であるところから、創造に関係する神と推定できるのであるが、GI、GII、GIIIという符号で名がつけられていることからわかるように、名前もわからず、どのような機能をもつ神々なのかも、よくわからない。しかし、GIは貝の耳飾りをし、頬に魚のひれのような印をもった横顔で描かれるところから、水に関係のある神と推測できる。チャク・シブ・チャクという説が現在有力である。GIIは横たわった人のような文字である。顔はK神と同じである。K神は、王がもつ錫杖として登場することが多い。GIIIはチェッカーボードのような文字である。太陽神とする説や、地下世界のジャガー神とする説などがある。

碑文には、碑文を記したときよりずっと古い日が記されていることがある。それらは、彼らの時代からみると、神話時代であったり、不確か

な歴史時代である。そうした日に言及する一節に登場する人物は、神や祖先であることはまちがいない。そうした一節は碑文資料にたくさんみることができるが、そこに登場する文字のどれが神または人物を表わすかはわかるものの、それらがどのような名を実際もっていたのかとか、どのように信仰の対象になっていたのかと問い始めると、わからないことばかりである。

祖先を神としてあがめることは、我々日本人にとってごく当たり前のことである。山や川などに神が宿っているという意識なども、日常的でさえある。しかし、西洋人にとっては、奇異にうつるらしく、マヤの研究のほとんどを占める西洋人の記述は、我々にはかえって不自然に感じることがある。マヤ人にとって、ずっと以前のいわば実態のない祖先ばかりか、二、三代前の祖先も、山や川や木々も、みんな崇拝の対象であった。

チアパス州に住む現代マヤ人は、先祖神は聖なる山に住むと信じている。聖なる山は一三の層からなるという。天界は一三層であり、一三の層の神がおり、それは空を象徴している。地下界は九層にわかれ、悪いものは地下にいるというのである。聖なる山に登ることは天国に昇ることに等しい。セイバの木の枝が各層に張り、それぞれの層には先祖神が住んでいるともいうのである。そうした考えはユカテク・マヤ人にもみることができる。

十六世紀の中頃に、ユカタンのマヤ人の民族誌を記したランダは、祖先の崇拝について次のような記述を残している。貴族や名士の場合は、火葬に付し、その灰を大きな壺に入れ、そのうえに神殿を建てた。非常に高い位の人の場合は、粘土でできた空洞の像に遺灰をいれていた。

他の貴族は、父親が死ねば、木像を作って、その後頭部を空洞にし、死体の一部を焼いたあと、そこに灰を納めて、蓋をした。それから、死人の後頭部の皮をはいで、それを木像のうえにはりつけた。残りは、風習通り、埋葬した。その像は、偶像のなかでもたいへん崇拝されて、保存された。昔のココム家の貴族たちは、死ぬと、首を切って、これを煮て肉をはがし、頭蓋の後半部を切り取って、前半分は、歯も顎骨も残した。この半分になった頭蓋骨は、瀝青の一種をぬり、生前の顔形を完全に再現させた。これを灰を入れた像とともに、家の礼拝所に他の偶像とともに安置し、たいそう崇拝した。祭りや祝いの時には、いつも食べ物を供えて、魂が休息し、供物を召すという来世で、食べ物に困らないようにした。

火葬は、一部古典期のグアテマラ高地にみられるが、後古典期に行なわれたものであり、古典期は土葬が一般的であった。それゆえ、それはメキシコ高原の影響を強く受けた後古典期の特徴といえるのであるが、先祖を崇拝する信仰の形態は、おそらく古典期、さらにはそれ以前にも適用できるにちがいない。ただ奇妙なことは、ランダも記しているように、死者を自分の住んでいる家の床下に埋める風習である。これは古典期にもみられる。これなど、我々の想像を越えている。

遺跡の発掘で見つかった墓は、マヤ人の死生観や神々についての情報を満載しているといってもよい。中でも有名なのが、ハイナ島である。ハイナは、さまざまなマヤの人をかたどった土偶とそれが出土した墓で、あまりに有名であり、そのため、マヤのネクロポリスとたとえら

れることがある。

ハイナ島はカンペチェから約三二キロ北のメキシコ湾に浮かぶ島である。一方の長さが一キロ、他方の長さが七五〇メートルの楕円形をしている。ユカタン半島の陸から、近いところで一〇メートル、遠いところでも一〇〇メートルしか離れていない。

しかしハイナ島は、墓地としてのみ機能していたのではない。大きな広場をたくさんのマウンドが囲んだ儀式センターも見つかっている。サックポールとサヨサルと呼んでいる高いマウンドが二つ目立つ。サックポールは約三〇メートルの高さである。しっくいが塗られていたらしい。遺跡の多くは、素晴らしい建物や彫刻物を残しているが、墓はそれほど多く発見されていない。土偶になると、もっと少ない。一九六四年の四月から六月にかけて行なわれた発掘により、約四〇〇余りの墓が発掘された。これにより古典期のマヤ人の葬制の一面を知ることができる。

ハイナの人は死者を直接土に埋めた。死者は伸葬の場合と、ちょうど赤ん坊が子宮のなかにいるときのような屈葬の形が多い。ほとんど顔に三脚の足をもつ土器が伏せられている。骨に赤色が残っており、体には赤が塗られたらしい。口にはしばしば翡翠の玉が置かれた。ランダも、死者は経帷子を着せられ、口には彼らの食べ物にも飲み物にもなったコイェムという挽いたトウモロコシやお金であった石を詰め、来世で食べるものに事欠かないようにした、と書き残している。副葬品としては、いろいろな形の土器、石や貝製の首飾りのほか、土偶が通常胸

か腕のあたりに置かれた。子供は、大きな瓶に入れられ、三脚付きの土器が蓋としてかぶせられた。頭蓋変形がマヤ人の間で行なわれていたことは有名であるが、ハイナの頭蓋骨にも、変形がみられる。ちなみに、この風習は遅くとも形成期後期には始まっている。歯の加工もよく行なわれていたらしく、門歯はいろいろな形に削られ、歯の表面は黄鉄鉱や貴石の玉がはめ込まれた。

墓から発見された土偶は変化に富んでいる。多くは儀式用の服装をまとった人間が表わされている。戦士、神官、神々。これらは彫刻に描かれているのとほぼ同じであるが、厳格な規範にもとづいた彫刻物より自由度に富んでいる。そのほか我々を魅了するのは、男や女、動物などをリアルに描いた土偶である。マヤ芸術一般に欠けている人間らしさが如実にここに表われている。

土偶は、きめこまかな粘土で造られたのち、焼かれており、うす黄色やピンク色になっている。多くは型捺しであるが、その場合、人物像の前面だけの場合が普通で、後面は手びねりである。空洞のなかに粘土玉を入れ、鈴にした場合があるし、穴を開け、笛にしたものもある。全体を手びねりでこしらえたものや、顔だけ型でこしらえ、胴体や服装などは手びねりで成形したものもある。普通白のスリップがかけられたのち焼かれ、それから赤や青などの鮮やかな色が塗られた。

発掘でもっとも注目を浴びるのは、墓である。この世からあの世に行くための装置といって

もよい墓には、現世でもっとも価値のあったものを、ともに埋葬することがふつうである。芸術的に優れ、物質的に価値のある品々が、副葬品として埋葬される。それゆえ、盗掘者がいの一番に探すものが墓ということになる。多くの墓が盗掘にあっているので、考古学者が掘り当てる手つかずの墓は数えるくらいしかない。残念なことである。考古学者が掘り出すのは、土器の破片ばかりで、完全な形をした土器を掘り当てることは、ほとんどないといっていい。

墓の形、規模や副葬品は、埋葬者の社会的な地位や富を反映している。またマヤの死後観を知る手掛かりを与えてくれる。

一六の遺跡の一一七〇の埋葬形態を調べたデータでは、二人以上の人が葬られた墓が、約四分の一で、圧倒的に個人が埋葬されている。埋葬形態は、伸葬も屈葬もみられるが、一部の遺跡では、好みが偏っている。ベイキング・ポット、バルトン・ラミー、アルトゥン・ハ、ツィビルチャルトゥン、ピエドラス・ネグラス、パレンケ、トニナでは、伸葬が好まれたが、サン・ホセ、ワシャクトゥン、アルタル・デ・サクリフィシオス、コバンでは屈葬が好まれた。

頭の向きについても、遺跡により、置かれ方に特徴がみられる。南向きが好まれたのは、ベイキング・ポット、バルトン・ラミー、シュナントゥニチ（ベンケ・ビエホ）、サン・ホセ、ホルムルで、北向きは、ピエドラス・ネグラス、パレンケ、トニナ、ワシャクトゥン、ティカル、東向きは、コパン、ツィビルチャルトゥン、セイバル、アルタル・デ・サクリフィシオス、南と東は、アルトゥン・ハで、マウンティン・カウでは北東が主である。このようなデータから、

マヤ人たちは、一定の方向に頭を向けたとはいえないが、それでも、好みは地域的にまとまっている。

ワシャクトゥンでは埋葬場所により、頭の向きに違いがみられる。神殿での埋葬は東向き、住居址では北向きが好まれている。アルトゥン・ハでは、神殿では南向き、住居地では東向きである。コパンでは、住居址では東向きが多く、公共の広場における埋葬は、西と南向きが多い。これらから、階級により、向きに違いをもたせたと推測できるが、それを裏付けるためには、もっとデータが必要である。

頭部に土器をかぶせたり、土器のうえに頭を置いた埋葬形態がある（一〇カ所で一一四例）。貝を載せた例（八例）や、メタテを載せた例（一例）も見つかっている。かめのなかに埋葬されることもあった（三三例）。

副葬品は、翡翠、絵文書、赤エイの骨、貝、黒曜石、土器などがあるが、それらは当時価値あるものであったことを示している。供物の種類としては、動物では、鹿、猿、ペッカリー、イヌ、ジャガー、魚、ヘビ、オポサム、アルマジロ、ワニ、亀、七面鳥、鳥などがあげられる。ケツァルコアトルは、死者の骨にみずからの血を注いで人間をこしらえたという神話があるが、骨を生命の源とみ、骨から絶えず生命が再生するという信仰があったためかもしれない。植物としては、コパル、ゴム、カカオ、トウモロコシ、カボチャの種、アナット、花、バルチェ酒などがある。その他、蜜蠟、蠟、神聖なる水、器、織物、翡翠、トルコ石、火打石、珊瑚、黄

鉄鉱の鏡、軽石、石筍などがあげられる。

マヤ人の価値観や儀式の方法などを教えてくれる副葬品のなかで、その当時もっとも価値があったものは翡翠である。しかしその翡翠は、我々のよく知っている翡翠ではなく、緑石といってもいいものがほとんどであり、美しい翡翠を見慣れた我々には、そんなに美しいと思われないものが多い。むしろ現代人は多色の土器のほうを美しいと感じる。多色の土器のほうを欲しがるので、それを市場に売り出すのであるが、古代の盗掘者は、土器には見向きもせず、翡翠を盗み出したようである。

土器にはたくさんの神々が登場する。最近、といっても一九七三年以降のことであるが、土器には、キチェの神話『ポポル・ウフ』に伝わる場面が描かれているという説が、一世を風靡した。『ポポル・ウフ』には、地下世界、すなわち死後に人間が行く世界のさまが、双子の英雄神フンアフプとシュバランケと、地下世界の王フンカメとウクブカメとの争いの話のなかで、描かれている。土器は普通副葬品として供えられ、死後の世界に関係するのであるから、『ポポル・ウフ』に描かれている物語が、土器に記されていると考えるのは、当然の見方である。確かにそれらしき場面が描かれている。

『ポポル・ウフ』は世界の創造の話から始まる一大叙事詩である。フンフンアフプとウクブアフプという双子の兄弟は、シュムカネという老女神の子供であった。双子は球戯に夢中になっていたが、その音のやかましさに、地下界シバルバの神が怒り、勝負を挑んだ。負けた二人は

犠牲にされたが、フンフンアフプの切り取られた頭は、ひょうたんの木にぶら下げられた。ある日シバルバの王の娘が、その木を見に行ったところ、ひょうたんと区別がつかなくなったフンフンアフプの頭は、彼女の手に唾を吐きかけた。それがもとで妊娠した彼女は、シバルバを追い出され、祖母であるシュムカネのもとに落ち着いた。そこでフンアフプとシュバランケを生んだが、二人は長じて立派な球戯者になり、吹き矢で狩りをする名人となった。二人は、意地悪をする異母兄弟のフンチョウエンとフンバッツを猿に変えたあと、父と同じように、球戯の騒音のため、シバルバに呼ばれた。急な階段を降りたあと、険しい丘や谷を通り、血や腐敗の川を無事渡り、四つ角にやって来た。黒い道には蚊を放ち、着座しているシバルバの王たちを次々に刺し、彼らの名を言わせ、力を奪ってしまった。五つの試練の館では、知恵を働かせ、無事通過した。暗闇の館では、シバルバの王たちは煙草を与え、それに火をつけているように命令したが、蛍をつけることで、煙草がなくならないようにした。

双子の英雄は一度は死んだ。しかしシバルバの宮廷に、踊り手として、魔術師として現われる。歌と踊りを見せたあと、犠牲にした犬や人を生き返らせたり、焼いた家をもとに戻したので、シバルバの王は感心して、今度はお前たち自身を犠牲にしてみろと言った。そこで、シュバランケはフンアフプの体をずたずたに切り裂き、生き返らせた。その魔力に魅せられたフンカメとウクブカメは、自分たちも同じようにしてみせてくれと頼んだ。その望みどおり、彼らをずたずたに切り裂いたが、生き返らせなかった。こうして二人は勝利した。そして天に昇り、

太陽と月になったという。彼らの父とおじが明けの明星と宵の明星となったように。

絵文書に現われる神の分類は今世紀初頭になされた。神の名や機能がわからないため、A神、B神などのようにアルファベットがつけられた。現在では、A神は死神、B神は雨の神チャク、D神は至高神イツァムナ、E神はトウモロコシの神という具合に、名や機能が与えられている。しかしそれもまだ確かではない。

土器によく登場するのは、L神とN神である。L神はパレンケの十字の神殿の入口横の石板に描かれているところから、非常に有名な神である。ジャガーの皮をまとい、頭には、伝説の鳥ムアン鳥を載せており、地下神の一つということがわかっているだけで、これも十分理解されているとはいえない。しかし、後古典期の絵文書に描かれた神のうちで、古典期にも現われる数少ない神の一つであり、地下界の老神であることはまちがいない。神々の体系が連綿と続いてきた証拠のひとつとしてあげることができる。

N神は、通常貝のなかから体を出したかたちで描かれている。L神と同じく老神である。トンプソンによると、バカブであるという。

土器にはよく似た文字列が記されていることがある。それは定型文といっていいものであり、土器により、それを構成するいくつかの文字を省いたり、新しいものを付け加えたりしているが、ひとつの定まった文字列が描かれたものである。それは、マイケル・コーによると、埋葬儀式のための定型文だという。しかし定型文は、埋葬儀式の葬送歌のようなたぐいではなく、

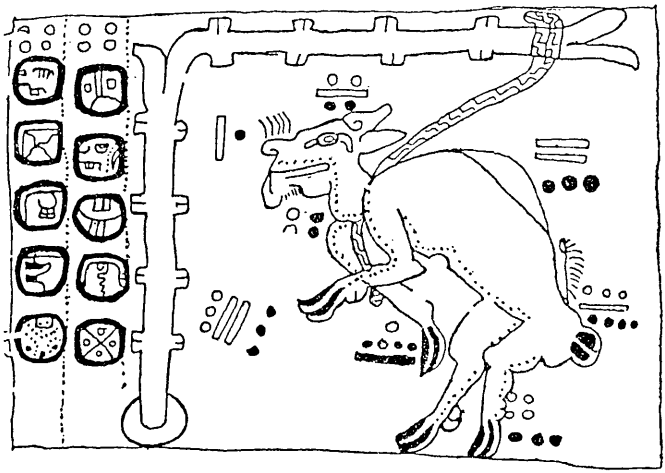

図19　わなを使って鹿を捕らえる図(『マドリッド絵文書』45ページより)

土器の所有者を示すための洗練された文だという意見が提出され、再検討されている。

土器に描かれている場面は、たしかに『ポポル・ウフ』で解釈できるものがある。しかしそればかりではない。それゆえ、土器に描かれた場面は『ポポル・ウフ』で解釈できるという説も、再検討されている。

土器に描かれている場面には、球戯の場面や宮殿で王が何か捧げ物を受けている場面や狩りの場面などがあり、当時のマヤ社会を知るうえで、欠かすことのできない資料となっている。マヤ人が行なった想像を絶する儀式もある。舌に穴を開けたり、ペニスに穴を開け、そこに紐を通したり、浣腸したり、腸を取りだしたり、自分で首を切ったり、さまざまな儀式の模様が描かれている。それは失われた絵文書といえるほど、豊かな情報を伝えている。

マヤでは、人間の体の様々な部分から血を流す儀式がよく行なわれていた。ふつう血は舌、耳、腕、ペニスから取られたが、まれに鼻や足からも取られ、皿や紙の受け皿に入れられ、神に捧げられた。穴開け道具としては、赤エイの骨や黒曜石が用いられ、穴には草や紐がとおされた。また胸や腹を裂いたり、首を切ったり、浣腸をする儀式など、いろいろな供犠が行なわれていた。それらについての記述は、十六世紀以降の記録にもみられるが、これらは実際に土器ばかりでなく、石碑やリンテル、壁画、絵文書などに描かれている。

スペイン人の征服後、マヤ人たちはキリスト教化されていき、それまで行なっていた人身御供やその他の犠牲儀式は禁止され、また入れ墨、ボディペインティング、鼻飾りや耳飾りも禁止され、仮面やその他の儀礼装具なども禁止された。土着の祝祭はきびしく規制され、キリスト教のテーマが導入された。こうして、土着の宗教儀礼は衰退していったが、それでも、十六世紀の中頃には、まだ人身御供や偶像崇拝が盛んに行なわれていた。そのためランダ神父をはじめとするフランシスコ会修道士たちの異端審問、弾圧が起こった。そのなかで有名なのが一五六二年にマニで行なわれた異端裁判である。その当時の状況を知る資料として、当事者であるランダが残した『ユカタン事物記』のほかに、ディエゴ・キハーダがユカタンの統治責任者であった一五六一年から一五六五年の間の文書がある。一五六二年の尋問から、その当時、学校の先生でさえ、人身御供にしばしば参加していたことがわかる。また一五七九年のスペイン王の質問に答えた『ユカタン風土記』にも、彼らがまだ偶像崇拝者であることが記されている。

図20　舌に穴をうがつ図
(『マドリッド絵文書』96ページより)

図21　首切りの図(『マドリッド絵文書』55ページより)

さらに一六九七年に征服されたイツァ族も、征服されるまで、胸を開いて心臓を取り出す儀式などを行なっていたことが、コゴリュードやビリャグティエレなどの文書にみられる。これらの文書を手掛かりにしながら、恐ろしい儀式について、幾つかみてみよう。

胸裂きについて、ランダはつぎのような記録を残している。

「祭儀の日が来ると一同は神殿の中庭に集まった。弓矢で生贄にする場合には、犠牲者を裸にし、その身体を藍色に塗り、尖り帽子を頭にかぶせた。そして悪魔のところへ着くと、一同は弓矢を手にし、彼とともに木柱のぐるりを厳かに踊り回って、踊りながら彼を木柱にあげてそこへ縛りつけた。その間、一同は彼に目を注ぎながら踊りを続けた。すると、衣装を着飾った

汚らわしい神官が木柱に上り、犠牲者が女であろうと男であろうとその恥部を矢で突き刺した。血が流れ出すと、神官は木柱から降り、悪魔にその血を塗りつけた。そこで合図が発せられると、踊り回っていたものたちが、順番に弓に矢をつがえ、早足に踊りながら、白い印がしてある犠牲者の心臓部目がけて、弓を射はなった。こうして彼の胸は針鼠のように矢の山と化した」

古典期には弓矢はなかったが、槍で縛りつけた人を刺している絵を壁画や土器にみることができる。

「心臓を摘出する場合には、厳かに大勢が付き添って彼を中庭へ運び、藍色に塗って帽子をかぶせたままの身体を供犠台である丸い大石の上に載せた。そこで神官と係のものが大石を藍色に塗り、悪魔に捧げられた神殿を清めると、チャックがこのあわれな犠牲者の身体を抱えて素早く台上に仰向けにし、四人がかりで、両方の腕と足を捕まえて引っ張った。そこへ執行人であるナコムが石刀を携えて現われ、鮮やかな手さばきと残酷さで、左側の肋骨の間、乳の下に一刀を入れ、猛虎のごとくただちにその手で心臓を引きだした。そしてこれを皿に載せて神官に渡すと、神官は素早くそのしたたる鮮血を偶像の顔に塗りつけた」

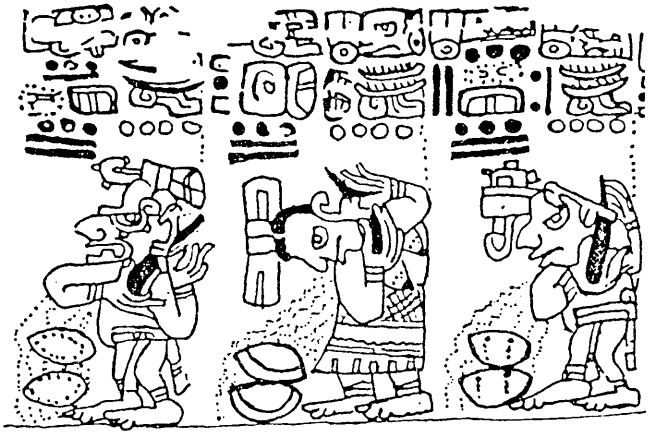

図22　耳たぶに穴をあける流血供犠(『マドリッド絵文書』95ページより)

古典期後期のピエドラス・ネグラスの石碑には人が石の上に寝かされ、心臓がとられている図が描かれている。切開後の血はケツァル鳥の羽で表わされている。土器にも腹や胸を裂く図がある。後古典期ではチチェンイツァの壁画や生贄の泉からとりあげられた金の円盤に、心臓を取る絵が描かれている。

供犠はキリスト教への改宗にともない、すたれていったが、それでも、十七世紀にも人身御供を行なっていた記述をみることができる。

「フランシスコ会の修道僧フアン・エンリケスと軍の大将フランシスコ・デ・ミロネスが、イツァ族の征服の途中、キンタナ・ローの南の小さな村で、ミサ中に襲われ、小さな掘っ立て小屋の教会の主柱に縛りつけられ、心臓をえぐり取られた。これは一六二三年（ではなく二四年）

の出来事である」。さらに一六九六年、イツァ族の征服がなされる一年足らず前にも、犠牲者が出ている。ドミニコ会の修道士、クリストバル・デ・プラードとハシント・デ・バルガスがイツァ族にとらえられ、足と手をX字状の木の枠にくくりつけられ、胸を裂かれ、心臓を取り出された。

一五六二年の異端尋問に際してのフアン・コウォフの証言によると、彼らは若者の縄をほどき、マットのうえに投げた。神官たちはロウソクを手渡し、彼らのうちの四人が少年をあおむけにし、手と足をもった。ペドロ・エワンがフリントナイフをもち、少年の左胸を開き、心臓を取りだし、ナイフで星印をつけ、神官ガスパー・チムにわたした。ガスパーは十字の印を刻み、高く持ちあげた。次にどの部分かわからない臓器を取り出し、もっとも大きな偶像であるイツァムナの偶像の口に置いた。それから彼らは偶像とともに、少年のからだ、心臓、血を大きなひょうたん容器に集め、首長の家に赴いた。フアンは証言する。「そこで彼らが何をしたかわかりません。彼らが去るとき、私に見たことを神父にしゃべらないよう注意しました。たとえ火あぶりの刑にされようとも、一言もしゃべってはならないと、彼らは付け加えました」

そのほか、オシュクツカブやホカバなどでも、胸を裂かれ心臓をとり出される儀式が行なわれていたことが記されている。ヤシュレウェアでは、二人の少女と一人の少年を一〇の土器製偶像に捧げた。少年と少女のうちの一人は犠牲石のうえで普通のやり方で犠牲にされた。もう一人の少女は手を後ろ手に杭に縛られ、ホクトゥンの王、フアン・イウィトとハラッチ・ウィ

ニクの兄弟が、少女の胸をポチョテの刺つきの棍棒で死ぬまで叩いた。そして三人の死体は深い洞窟に投げ込まれ、入り口が大きな石で蓋をされた。ホカバでは、生贄は凸型の石のうえに胸が突き出るように置かれ、数人の人に押さえられた。執行者は神の手といわれる石（u kab ku）のナイフで生贄の胸を裂き心臓を取り出し、神官に手渡した。神官の一人は血を集め、偶像の顔に塗った。他の神官は心臓を新しい皿（zuhuy lac）に置いた。同じ様な皿で蓋をし、神官は順に祈りを唱えながら偶像に捧げた。それから心臓が焼かれた。

ランダは心臓をとったあとの、皮剝の儀式を記している。

「この（心臓を取り出す）儀式は、時には、神殿の高い祭壇と大石の上で行なわれたが、その場合には、儀式が終わるやいなや、死体はほうり出されて、祭壇を転がり落ちていった。神官の助手たちがこれを下で受け止め、手足を除く身体の皮を剝ぎ取ると、神官は裸となってその皮を身に着けて、その姿でみんなと一緒に踊りを踊ったが、これは彼らの間ではきわめて荘厳な儀式であった」

高地マヤのキチェ族の神話『ポポル・ウフ』にも、カブラカンに英雄の双子が縛られ、大地につきおとされる記述がある。犠牲者の皮を剝ぎ、神官がそれを着ることもあった。メキシコやその他の地では、この儀式はシペという再生の神と関係している。

「このようにして生贄に供されたものは、普通は神殿の中庭に埋葬されたが、埋葬されない場合に、その身体は、参会者や首長たちのあいだで分配されて食べられた。両方の腕と足と頭は、神官とその助手のためのものとされていた。そして生贄にされたものは聖者として取り扱われたのである。戦争で捕虜にされたものが捧げられた場合には、首長がその骨を取り、これを踊りの際に勝利の印として使った」

一五一一年、ダリエンからサント・ドミンゴへ向かったバルディビア一行は、ジャマイカの近くで遭難し、ユカタンへたどり着いたが、「この不幸な一行は邪悪な首長の手に落ち、バルディビアほか四名が偶像に捧げる生贄とされてしまったが、首長はその後で、彼らの肉を供して宴を開いた。アギラールとゲレーロとさらに五、六名のものは、もっと肥えるようにと残されたが、彼らは檻を破って森の中へ逃げ込んだ」とランダは書いている。マヤ人の間に人肉食いの風習があったことをうかがわせる記述であるが、ラス・カサスやシウダー・レアルなどはマヤ人は人肉食いの習慣はなかったと書いている。

首切りもあった。チチェンイツァの球戯場の浅浮彫りには、競技の勝利者が切り取った頭をもち、頭を切りとられた人の首からは血の代わりに蛇がふきだしている図が描かれている。首切りは形成期からあった。たとえばイサバの石碑二一号では、首を切り取られた体から羽の形に血が流れている。切り取られた頭は、ボナンパックの壁画では葉の上に置かれている。『ド

レスデン絵文書』の三四頁では、トウモロコシの神の頭がピラミッドの上に置かれ、まわりに音楽隊がいる。土器には、執行人が首を切る場面を描いたものの他に、自分で首を石刀で切っている場面を描いたものもあり、首を切る儀式は自分でも行なわれていた。

鼻を打ち砕いたあと殺すペッチニ（pech' ni）という儀式も、ランダによると、あったが、これが古典期時代にあったかはよくわからない。

「舌に斜めに穴をあけ、それに藁を通したが、これは大変な痛みを伴うことであった」とランダは記しているが、舌に紐を通している儀式は、ヤシュチランのリンテルに描かれているし、『マドリッド絵文書』にも描かれている。

ランダはまた「生贄を捧げる男たちが神殿に集まり、一列に並んで、それぞれの性器に穴を斜めにあけ、その穴へできるだけ多くの糸を通して、つなぎ合うという供犠を行なうこともあった」と書いているが、その供犠は『マドリッド絵文書』にも記されている。

「男性の恥部の上皮を切って、耳を切ったときと同じように、後をそのままにしておくこともあった」

ペニスを穴開け器で刺している図が描かれている土器がある。また墓から、恥部の付近に赤エイの骨の穴開け具が置かれているものが見つかっている。パレンケの王が手にもっている道

具は、ペニスの穴開け具である。

ボナンパックの壁画に、勝利者の前で、囚えられた人の指から血が流れている図があり、指から血を流す儀式があった。

「彼らは、自らの血を生贄に捧げたが、あるときは自分の耳のぐるりをずたずたに切って血を出し、後をそのまま印として残したし、あるときは、頬や下唇に穴を開けたり、身体の一部を切りとって血を出した」。耳に穴を開けている図は、『マドリッド絵文書』に描かれている。

「彼らは身体のこのようないろんな箇所を傷つけて流れ出す血を悪魔『偶像』に塗り付けたのだが、もっとも多量の血を塗ったものがもっとも勇敢な男とされていたから、彼らの息子たちは、幼時からこの供犠を行なっていたし、この儀式に対しては、全く驚くほどに熱心であった」

「カンペチェでは陸地に近い海中に、階段が全面についている四角い殿堂が建っているのをみつけたが、その建物のうえには一体の偶像と、その両脇に食いついている二匹の猛獣の彫刻と、さらにピューマを呑みこんでいる大蛇の石の彫刻が置かれていた。そしてこの動物の彫刻はいずれも生贄の血で血みどろになっていた」

「女たちもきわめて信心深かったが、このように血を流すことはしなかった。しかし彼女たち

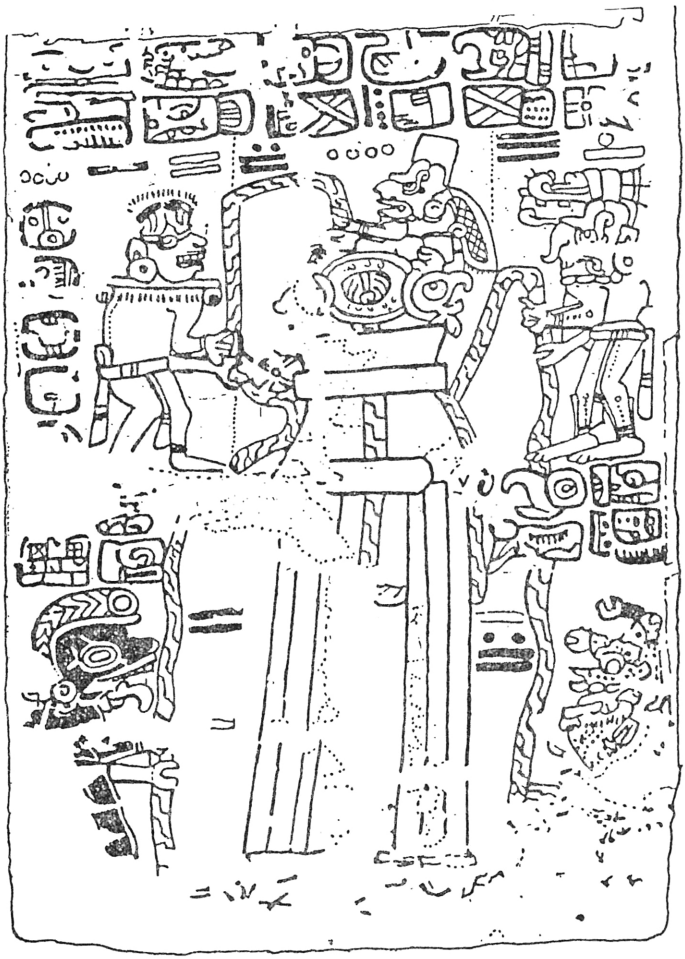

図23　ペニスに穴をあけ、ひもでつなぐ図(『マドリッド絵文書』19ページより)

も、空ゆく鳥や、地をかける動物、さらには水に泳ぐ魚などで、捕らえることができるものは何でもとってきて、その血を悪魔の顔にべたべたと塗りつけたし、また自分たちの手許にあるものは何でも偶像に捧げた。彼女たちは動物の心臓をえぐり出してこれを捧げたり、生きたままや死んだ動物を、そのままあるいは煮たうえで捧げた。パンや酒をはじめ自分たちのあらゆる食べ物や飲み物をふんだんに供えた」

供犠には、生きたままの身をチチェン・イツァの池に投ずることもあった。池や泉に子供や大人を投げ込んだり、自ら飛び込むこともあった。雨の神チャックが底に住んでおり、神のことばを聞き、三日目に再生すると信じられていた。多くの子供がチチェン・イツァに連れていかれ、井戸に投げ込まれた。神託を聞くために生きたままほうり込まれたものもいた。しかしほとんどは最初に土地の偶像に犠牲にされ、死体がセノーテに投げ込まれた。

供犠は、マヤばかりでなくメソアメリカの宗教で、重要な役割を果たしてきた。神に捧げる供物は、食べ物、香、宝物から、動物や人間の犠牲まであった。それらは、雨乞いや豊作を祈るための場合や、何か不幸や困窮が起こったときの解消のためや、王権の正当性を得るためや、個人の崇拝、先祖の崇拝に至るまで、さまざまな機能があったものと考えられる。

新年の儀式

現代マヤ人が伝える神々のなかで、古代に通じる有名な神のひとつに、ケクチ族の伝えるマムがある。これは絵文書の新年の儀式を記した章に登場する。

年の終わりから新年を迎えるために行なう一連の儀式は、ランダが記している。それは『ドレスデン絵文書』にも『マドリッド絵文書』にも描かれている場面と多くの点で符合する。

マヤの新年は、その暦の仕組みから四つの異なる日の名前で呼ばれるところからか、東西南北の四つの方位と関係づけられる。新年は三六五日暦のポープ月の最初の日に当たるが、その年は、その日に当たる二六〇日暦の日の名前で呼ばれていた。つまり三六五日で一周する一年の最初の日は、二六〇日暦のどの日に当たるかというと、碑文時代は、アクバル、ラマット、ベン、エツナッブであった。それがランダの時代には、一日ずれて、カン、ムクック、イシュ、カワックの日となってしまっており、一年はそれぞれ、カンの年、ムルックの年、イシュの年、カワックの年と呼ばれていた。四年でそれは繰り返した。『ドレスデン絵文書』は、碑文時代と同じ組をもつが、『マドリッド絵文書』はランダと同じ組をもち、絵文書でも、成立年代が異なることがわかる。

二六〇日暦の二〇の日は、それぞれ東北西南に順に割り当てられたので、次のようになる。

東	赤	イミシュ	チクチャン	ムルック	ベン　カーバン
北	白	イック	キミ	オック	イシュ　エツナッブ

西　黒　アクバル　マニック　チュエン　メン　カワック
南　黄　カン　ラマット　エッブ　キッブ　アハウ

ランダによると、マヤ人は多数の神々を崇敬していたが、そのなかでも、バカブと呼ばれる四神を、特にあがめていたという。この四神は、神がこの世を創造したとき、天が落ちないように支えるためにと、四隅に置いた兄弟神であるといわれており、大洪水によって、この世が滅ぼされたときに脱出した神々だともいわれている。この四神にはそれぞれ別の名が付けられており、天を支えるために置かれている場所も、その名前によって示されていたが、それぞれの神、およびその居場所には四つの主の日文字の一つが当てられていた。カンの年は、別の名を、ホブニル、カナル・バカブ、カン・パワフトゥン、カン・シブ・チャクとも呼ばれるバカブのしるしの年であった。

それぞれの年には、新年を迎える儀式が行なわれたが、たとえばカンの年を記すと、つぎのようになる。

ユカタンではどの村でも、東西南北の四方の入口に、二つの石の山をそれぞれに向かい合わせて積み重ねておく習慣があった。これは、毎年、年の終わりの不吉な五日の日に催す二つの祭りを、次のようにして祝うためのものであった。すなわち、カンの年は、ホブニルが予言する年であったが、インディオ達によれば、この両者はいずれも南を支配していた。この年、彼

写17　キチェ・マヤ人の儀式。四方神と中心の神への供物の奉納
（グアテマラのサン・フランシスコ・エル・アルト）

らはカン・ウ・ワヤヤブと呼ばれる中を空洞にした土像を作り、それを、南の所に積みあげた乾いた石の小山の所へ運んだ。そして村の長を選び、その彼の家で、不吉な日々の祭りを行なった。祭りを催すために、ボロン・サカブという悪魔の像をこしらえ、みんながやって来られる公共の場所に建てられた村の長の家に安置した。これがすむと、貴族と神官と村の男たちが集まった。さきに偶像を安置した石の山までの道を掃き清め、アーチや緑の葉で飾ったのち、祈禱をしながら皆でそこにいった。石の山のところへ着くと、神官は、四九粒のトウモロコシを粉にして、香と混ぜたものを、焚き込めた。このトウモロコシを挽いた粉をサカフと呼び、貴族の飲み物は、チャハルテと呼んだ。偶像に香をたき、雌鶏の首をはねて、偶像に供物として捧げた。それがすむと、カンテという木に偶

像をさしこみ、この年がよい年になるようにとの願いをこめて、水を表わす天使をそのうしろに背負わせた。この天使の像は色をつけて恐ろしくみえるようにしたものだった。そして賑々しく踊りながら、ボロン・サカブの像が安置されている村の長の家へもっていった。村の長の家からは、四一五粒のトウモロコシを焼いてつくったピクラ・カクラという飲み物をとって、貴族たちや神官たちの所へもっていった。そして飲み干した。村の長の家に着くと、もってきた偶像を、その家に安置されていた悪魔の像の前に置き、たくさんの食べ物や飲み物、肉や魚を供えたが、この供物は、その場に集まった見知らぬ人々に分けられた。神官には鹿の足が捧げられた。他のものたちは、耳を傷つけて血を流し、その血をその場に置かれているカナル・アカン・トゥンという悪魔の石像に塗りつけた。パンとひょうたんの種入りのパンを心臓の形に作って、カン・ウ・ワヤヤブの悪魔の像に供えた。このようにして不吉な日の間中、この像や偶像は安置され、トウモロコシをひいた粉を混ぜた薫香をたいた。

凶日が終わると、ボロン・サカブの像を神殿に運び、カン・ウ・ワヤヤブの像を村の東へはこんでいき、そこに投げ捨て、新年の儀式をするため、各自しなければならないことをしに、家に帰った。儀式が終わり、悪霊が取り払われると、この年をよい年とみなした。というのは、カンの文字とともに、バカブ・ホブニルが支配したからである。バカブ・ホブニルは、兄弟たちのようには罪を犯さなかったので、彼の支配する年には、災害はやって来ないといわれていた。しかしそれでも災害の起こることがたびたびあったから、悪魔は奉仕を続けさせるために、

周到に構え、もしも災害が起これば、勤めや勤行者に落ち度があったからだと、儀式を執り行なうように仕向けた。いつも人々が欺かれ、盲目のままであった。イサムナ・カウィルと呼ばれる偶像を作らせ神殿に安置し、広場で、キックという樹液というか樹脂で作った玉を三つたくように、そして、犬一匹、または人間一人を生贄にするよう命じた。生贄を行なう順序はあったが、この祭りでの生贄の方法は異なり、まず、神殿の広場に石で大きな山をこしらえて、それよりも高いところへ生贄にする人間か犬を置き、犠牲者を縛りつけ、その高いところから、石のうえに投げ落とした。そして神官たちが取り押さえ、素早くその心臓を取りだし、新しい偶像のところへもっていき、これを二枚の皿の間に供えた。そのほかにも、いろいろな食べ物を供えた。この祭りのために選ばれた村の老女たちが、独特の衣服をまとって踊った。天の使いが舞い降りて、この供犠を受け取るといわれていた。

それぞれの年には、以下に挙げるような神々が崇拝された。バカブ、パワフトゥン、シブ・チャクは、それぞれその前に、黄、赤、白、黒を表わす語彙がついているが、これは南東北西の方角と結び付く色である。

カン　　ホブニル、カナル・バカブ、カン・パワフトゥン、カン・シブ・チャク
　　カン・ウ・ワヤヤブ、ボロン・サカッブ、イサムナ・カウィル、
　　カナル・アカントゥン

ムルック　カンシエナル、チャカル・バカブ、チャク・パワフトゥン、チャク・シブ・チャク
チャク・ウ・ワヤヤブ、キンチアハウ、ヤシュ・コカフ（コク・アフ）・ムット、
チャク・アカントゥン
イシュ　サクシニ、サカル・バカブ、サック・パワフトゥン、サック・シブ・チャク
サック・ウ・ワヤヤブ、イサムナ、キンチアハウ・イサムナ、
サック・アカントゥン
カワック　ホサンエック、エケル・バカブ、エック・パワフトゥン、エック・シブ・チャク
エック・ウ・ワヤヤブ、ワック・ミトゥン・アハウ、
エケル・アカントゥン
チチャック・チョブ、エック・バラム・チャク、アフ・カヌオル・カブ、アフ・ブ
ルック・バラム

カンの年と同じように、新年の前の凶日に、石像や像を祭り、香やトウモロコシの粉をまぜた薫香を焚いた。このような祭儀を行なわなければ、その年のうちに流行する病気にかかるものと考えていたのである。

そのほか、薬の神といわれるイシュチェル、イサムナ、キット・ボロン・トゥン、アハウ・チャマヘスや、狩猟の神アカヌム、スフイ・シブ、タバイ、漁師の神というアフ・カック・ネ

ショイ、アフ・プア、アフ・キット・サマル・クン、カカオ畑の主の守護神エック・チュアフなど、たくさんの名前が記されている。しかし残念ながら、これらはまだ古典期に適用できていない。